

## 東京都 NIE 推進協議会夏のセミナー講演記録

### 核兵器を作ったのが人間なら

#### ー被団協 和田征子（まさこ）さんの訴えー

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の事務局次長の和田征子さん（81）が、昨年ノーベル平和賞を受賞した被団協の代表として、オスロの博物館での平和会議（8月6日）での講演を終え、先日帰国された。その後間もない8月18日に、東京都 NIE 推進協議会の夏季セミナーで、和田さんの講演を聴く機会を得た。以下、私のメモを基に講演の内容を記す。

和田さんは、講演の最初に「私が被爆したのは1歳10カ月のとき。これから話すことは母から聞いたことだけです。自分では話を作っていません。私は実相（リアリティ）を大切にしています」と前置きして、語り始めた。「私は爆心地から2.9km離れたところで被爆しました。朝から出ている空襲警報が解除されお昼ご飯の支度をしているとき、原子爆弾が投下されました。爆心地は、当時の広島では郊外に当たる住宅地。辺りは一瞬に炎に包まれました。生きている人は燃え盛る炎の中を移動できずに、多くの人が東側の琴平山を回り、そこから南の市街地へ向かって下りました。私は市街地に住んでいました。黒焦げになった人々が歩いてくる姿はアリの行列のようでした。そして、避難してきた人たちの傷の手当に、母は奔走しました。自宅には、煮沸して洗濯した布切れがきちんとたたんで常備してあり、それを使って手当をしました。自宅の隣の空き地には、大八車に乗せられた遺体が運ばれ、積まれて燃やされていました。『茶毘にふす』という焼き方ではない。ただ燃やすだけ。毎日毎日燃やしていました。そのうち、そんな光景を何も感じなくなりました」とお母様の話を語る。

さらに、和田さんは「原爆投下時に、B29 はラジオゾンデも落としました。なぜだと思いますか？」と問い、「効果を測定するデータ、数字だけ

を伝えたのです」と自答し、「しかし、その下で何が起こっていたかを伝えることはしませんでした」と言い、「母は怒っていた」と語気を強めた。

「この写真は、遺体が焼かれた場所で撮った私が2歳のお正月の家族写真」と映像を示し、「この空き地に畑を作って野菜を育てました。母はしばらく看護師をして被爆者の手当をしていましたが、人の体から湧き出る多くの大きな蛆虫をつまみ出していて気を失い、その後、看護師の仕事はできなくなりました。15日に玉音放送が流れたとき、長崎の人々は何も知りませんでした。情報が届いていなかったのです」と説明し、「トーマス・ファール（マンハッタン計画の現場責任者）は、『放射能の影響はない』と上官に報告しました。結果として、アメリカは原爆被害の情報を隠蔽したのです」と訴えた。

そして、ご自身の言葉として「1956年長崎での第2回原水爆禁止世界大会で被団協が結成されました。私は間もなく82歳になりますが、まだ『青年部』。小さな組織です。被団協は言葉によって、3度目の原爆を回避してきました。世界は原爆について発言するようになり、変化が起きています。核兵器は使ってはなりません。使わないことが世界を守るのです。核兵器を作ったのが人間なら、無くせるのも人間です。被爆者に対しては『同情』ではなく『共感』をしてほしいです。自分事として考える『共感』が大事」と、現在の思いを語り、最後に「8月は多くのメディアで取り上げられましたが、すぐに少なくなります。しかし、私たちは毎日が被爆者なのです」と述べ、参会者にこれからももっと発信してほしいと訴えて講演を締めくくった。

文責：日本新聞協会 NIE コーディネーター 関口修司